

藩政時代初期の鷹巣盆地における新田開発と地域開発*

Development of paddy field and regional development in the Takanosu basin in the first time of the Edo

- 坊 沢 村 を 例 に -

The case of the Bousawa village

川村公一** 清水浩志郎*** 木村一裕****

1. はじめに

本研究は、藩政時代初期の頃の純農村地帯の町づくりについて考察した概要を報告するものである。秋田県北部を流れる米代川の中流部、鷹巣盆地の坊沢村を例として、治水・利水や街道の整備などの土木技術がどのように貢献して町が発展したのかを明らかにする。時代がさかのぼり史料が乏しいことから、周辺の地形や河道の変遷、地方文書などの資料より、その形成過程について工学的に評価した。

2. 坊沢村の地理的環境

米代川は、奥羽脊梁山脈と出羽丘陵を完全に横断する先行河川であり、本流は東から西に流れをとり河口部の能代市を経て日本海に注いでいる。それに対して支流は南や北からほぼ直交するように合流している。¹⁾

鷹巣盆地は二つの隆起帯の褶曲運動により、鷹巣盆地部が南北に長い卵形低地が形成された。基盤の地質が第三紀の堆積岩類から構成されており、かつては水底であった。第四紀なって米代川の流出土砂が湖底に沈降堆積した。この第四紀の湖は「古鷹巣湖」²⁾と呼ばれている。その後、相対的な隆起・上昇により陸化したが、盆地内への土砂堆積は藩政時

代まで続いている。それは、「胡桃館埋没建物」遺跡（埋没木材から年代は902年³⁾）に建てられたと推定）や「小勝田埋没家屋」遺跡があることから、盆地内は洪水氾濫を繰り返していたことを物語っている。坊沢村は、鷹巣盆地のほぼ中央部の北側に位置している。

3. 坊沢村の草創期

秋田県北地域が正史に登場するのは、「三代実録」や「類聚国史」の「元慶の乱」である。元慶2(878)年、出羽国の蝦夷や俘囚が秋田城司に反乱を起こし、秋田城を襲った。蜂起したのは上津野(鹿角地方)、火内(大館地方)楡淵(鷹巣盆地、阿仁地方)、野代(能代)などであった。

「鷹巣町史」によれば、延久5(1073)年の頃、綴子村(坊沢の隣村)支郷知子内村は柵養の集落として米代川右岸に切り開かれたたが、米代川の大洪水のめ絶村になった。⁴⁾当時の村落は、多くて10戸程度の散居形態で、細々と農業が営まれていた。

坊沢村の発祥は、現在の集落背後の山手の高台であったと言われ、「房ヶ沢」という小さな沢が村名の由来とされている。発祥時期の明確な年代は特定できないが、正徳元(1711)年に房沢神明社地拡張の際、応永23年(1416)と記銘した鰐口と金銅造円鏡が発見されたというから、この頃以前の草創であることは間違いない。享保15(1730)年に房沢村から坊沢村に改称されている。

浅利氏は、源頼朝の奥州合戦の勲功によって比内の地を与えられ、鎌倉時代初期に地頭職を得て入部した。その後、戦国時代、浅利則頼と父朝頼が甲斐国から一族郎党を引き連れて比内に入り、十狐城を築いたのが永正15(1518)年である。則頼は、有力な家臣を各村々に配置した。「浅利與市分限」⁵⁾

*キーワード；坊沢村・関根留め・街道・町づくり

** 正会員 国土交通省秋田工事事務所

〒010-0951 秋田市山王一丁目10-29

TEL 018-823-4167(内351)、FAX 018-864-5204

*** フェロー 工博 秋田大学教授

**** 正会員 博(工) 秋田大学教授

〒010-8502 秋田市手形学園町1-1

TEL 018-889-2359、FAX 018-889-2975

によれば、比内各所に支城を設け浅利氏の家臣を配置し、それぞれの地域を知行地として与えた。「高御知行地之分 坊沢村住 長崎尾張」とあり、長崎尾張は浅利氏の御側衆で、坊沢村はこの頃から町づくりが始まった。二代目長崎尾張忠吉が天文 19 (1550) 年から房沢村に帰農し本格的な開発が進められた。「浅利頼平領内村数註文」⁶⁾(秋田家文書)によれば慶長 2 (1597) 年 9 月に

はふさわ(坊沢)村 田少・畠 家一五、六とあり、御知行 200 石であった。太閤検地が実施された頃の村数である。長崎家の旧屋敷は、俗に「館神堂の館」と称され、現在の集落の山裾に位置していた。当時の地形はなだらかな傾斜をなし、その下には湿地帯が広がり、万治 2 (1659) 年の「大正院尊久記録」⁷⁾によれば、

茨茅繁茂し四方少しも見ゆる事は無之候
という景観であった。山裾が湿地帯までなだらかに分岐し、その先端の舌状台地は大小 9 つあったという。居住環境も地形的に適し、集落の南側がこのような湿地帯で日当たりや風通しも良く、沢があり近くには米代川もあり、用水確保も至便で、新田開発の可能性を大いに秘めていた地域であった。

藩政時代初期の鷹巣盆地周辺の集落と開発可能な原野を図 - 1 に示す。

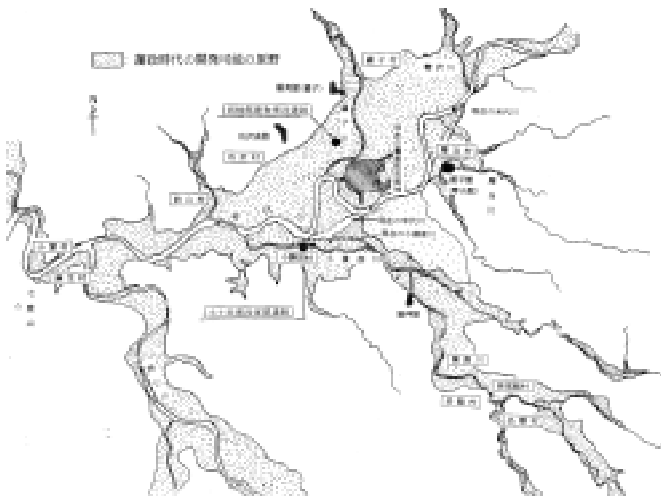


図 - 1 藩政時代初期の集落と開発可能地

4. 坊沢村の町づくり

この長崎家は、坊沢村で代々肝煎役をつとめた旧家である。系譜を伝える「長崎家文書」(鷹巣町)がある。この地方文書の中に天明 8 (1788) 年に書

き記された「長崎清兵衛覚書」⁸⁾があり、町づくりの経緯を知る手がかりがある。

三代目長崎兵庫助忠綱の時代、慶長 8 (1603) 年には、佐竹義宣が秋田へ国替えになった直後に先竿検地が実施され、家数 22 軒であった。

四代目長崎兵庫助の時代には、積極的な田畑の開発が進められた。慶長 19 (1614) 年に打直検地(中竿検地)が行われ、家数およそ 41 戸と増大している。町づくりや開発された田畑は盆地最下流の米代川沿いの最低位段丘の荒地であった。このような立地条件から宿命的に洪水被害に悩まされることとなる。この当時の洪水記録として、少し時代は下がるが鷹巣町肝煎の成田兵左衛門長元 (1778 ~ 1848) が「永年記」⁹⁾(鷹巣町)で記している。

一、寛永二乙丑年 八月大洪水なり 白髭の老翁米代川の真中を通り候由、依而是を

世上にて白髭水と唱ふるなり

寛永 2 (1625) 年 8 月の「白髭大洪水」という未曾有の大洪水で、「館」と呼ばれた住居地の大部分が崩れ落ち、住居不能の日常生活もままならない状態となった。当時の米代川は、今まで住んでいた高台の住居までも被害を及ぼしており、鷹巣盆地の原野を幾筋もの流れが不規則に蛇行して洪水被害が町づくりの大きな支障であったことを物語っている。この洪水で、寛永 6 (1629) 年に、上の台地に移転せざるを得なかった。この時の引越したのは「古屋敷館」から長崎兵庫助など、「小館」から多郎左衛門など合計 10 戸が移住したという。

五代目長崎兵庫助忠頼の時代、3 回目の藩内総検地(後竿検地)が慶安元 (1648) 年 4 月に実施された。御伝馬除屋敷(伝馬役の屋敷は物成米が免除)29 軒、ほかに寺、肝煎、小走、山伏、座頭、風呂屋敷の 6 軒があった。街道の整備や田畑の開発も次第に上向きになっていく。しかし、かんがい方式は、従来からの沢水や湧水を利用する程度のもので、開発面積にはおのずと限度があった。未開地から新田を開発するには、安定的にかんがい用水の確保が課題となる。坊沢村では、忠頼の時代の寛文年中 (1661 ~ 1672) の頃に、米代川本流から直接取水する「房沢堰」が開発されている。上流の糠沢地区の蟹子沢に取水堰をもうけ、延々二里余(約 8 km)の関筋、すなわち水路をによって房沢村の田地まで導水し

た。これによって寛文期に飛躍的に開発が進んだ。

六代目長崎兵助は延宝元（1673）年、22歳の若さで肝煎役を継いだ。この時代は新田開発もピークに達し、足踏み状態が続く。これは房沢村の立地条件からである。洪水などの自然災害の頻発により、開発された新田や耕地は少なからず荒廃していくこととなる。治水事業の未熟さが、町づくりが進まない大きな要因であった。御伝馬除屋敷74軒のほか、肝煎、小走（本郷・大向の2軒）、山伏、座頭（2軒）、郷蔵、阿弥陀堂屋敷共9軒の除屋敷、他に支郷高屋敷61軒の本支郷合わせて家数144軒であった。

地方文書などから坊沢村の戸数の推移を図-2に示す。

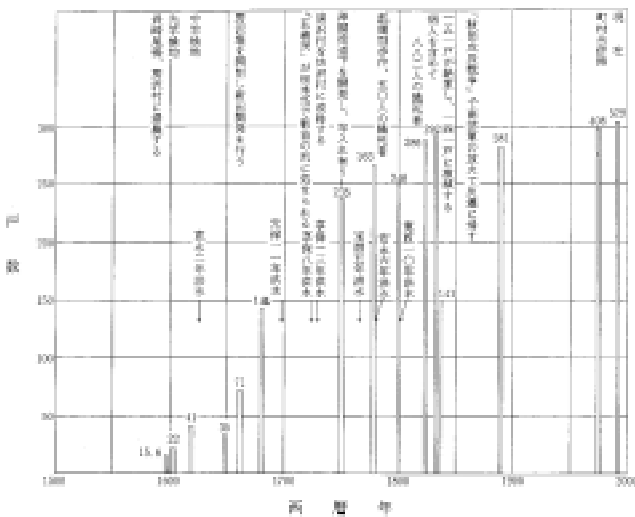


図 - 2 坊沢村の戸数の推移

5. 取水堰の構造

藩政時代初期には、米代川治水事業はまだ不完全であった。その結果、米代川流域はたびたび洪水に見舞われ、地域開発は進まなかった。しかし、そうした折りにも細々と治水・利水事業は実施されていた。ここでは、鷹巣盆地に構築された取水堰の例を示したい。

秋田県立図書館所蔵の中に「米代川絵図」（図-3）がある。作者は不詳であるが、享保年間（1730年代）に作成されたものといわれている。その中に鷹巣盆地でかんがい用水として取水されている三つの関根（坊沢堰・太田堰・鷹巣堰）が描かれている。この絵図から構造を知ることができる。

鷹巣堰は、「鷹巣村御竿萬日記」（鷹巣村役場蔵）¹⁰⁾によれば、正徳3（1713）年の口上書に「鷹巣村新規二御取立八慶安元子（1648）年参川様御代二御関御取立御用」とあり、この頃から本格的に開発された。坊沢堰は、前述のとおり寛文年中（1661～1672）に開発された。太田堰は、寛文年中に近藤掃部が米代川を堰き止の坊沢堰の下流から堰筋を通し引水したといわれている。¹¹⁾



図 - 3 米代川絵図の鷹巣三堰の構造

関根の構造は、鷹巣と坊沢・太田堰ともに枠留めであるが、同じ枠でも構造に若干の違いがある。

鷹巣堰は、関根留が接岸する右岸部に取水口として20間（36m）の開口部を設け、流れ込み式の構造である。河床部には何十個という数の枠を連結している。丸太で立方体の枠を造り、貫木、柵木を付け、中に柴を敷いて川石を詰め込んでいる。いわゆる沈枠（木工沈床）を連結したものが堰体の構造である。

太田堰は、米代川本流を斜めに横切るもので取水口を設けている。堰体は「合掌枠」の構造で、合掌木を何本も並べ、頭部に締木をのせて固定している。木枠の中に柴や石を詰める構造は、沈枠と同じである。坊沢堰は、太田堰と同様の構造であるが水深が深いところでは沈枠を二重にしている。また、小さな川を横断するため設ける関根留は、仮設的なもので木杭や柴を使った簡単な構造ものであり、「柵留」、「敷柴留」などとも呼ばれている。

6. まとめ

佐竹氏が秋田に国替えになる以前に開発されていた本田の石高はおよそ 20 万 6,000 石であった。佐竹氏が国替えとなった藩政時代の初期は、まだ開発が可能で広大な原野が川沿いに広がっていた。原野の開発には「指（差）紙」と呼ばれる開発許可状を藩からもらわねばならなかった。「指紙」は、家臣は年貢を直接徴収する土地の地行地を増やすことができたこと、土地を持たない農民は開発地によって自給自足できることなど、両者の利害が一致し開発が盛んに行われた。

表 - 1 秋田藩前期の当高推移¹²⁾

年 代	当 高 (約)
寛永 2 (1625) 年	248,000 石
正保 2 (1645) 年	285,000
寛文 4 (1664) 年	320,000
寛文 11 (1671) 年	329,000
元禄 10 (1697) 年	348,000
宝永 2 (1705) 年	350,000
正徳 3 (1713) 年	349,000

その結果、佐竹氏が秋田に国替えとなったあとの 17 世紀中頃の「中竿検地」では開発された土地の石高が約 77,000 石と増加し、その後、後竿検地以降に開発された土地の新田の石高は約 10 万 5,000 石、合計 390,000 石に増加している。

中世の頃、秋田地方の村数はおよそ 800 ケ村あった。それが新田の開発で行政単位として村数が 1,000 ケ村に増えている。この新田村を見ると、米代川や雄物川、湖沼付近が多い。かんがい用水を幹線河川から直接取水したり、用水路をつくって導水したり、大規模なため池などにより開発したことを物語っている。これらの新田村が開発された背景には、土木技術の貢献が大きい。未熟ながら洪水被害から田畑を守るため、河畔林（柳林）の育成など治水対策が実施されている。

その具体的事例として、米代川中流部鷹巣盆地の坊沢村での新田の開発や町づくりの経緯を調査し

た。

藩政時代初期の米代川流域における町づくりは、初期は山裾に立地している山寄りと呼ばれる高台であったが、田畑の開発の必要性から本流沿いに新しい町づくりが行われた。鷹巣・太田・坊沢などの集落はその典型で、いわゆる沖郷おきごうと呼ばれる集落であり、本流近くに進出している。

町づくりの基本的性格は、生活の糧である田畑の開発であり、治水・利水事業が大きな役割を果たした。町づくりが進めば、経済活動や人的交流が活発となる。街道も除々に整備され、御伝馬屋敷や寺、座頭、郷蔵、風呂屋敷など、地域のネットワークやコミュニティが形成されていった。

今後は、現在まで確認されている 8 ケ所の埋没家屋遺跡からの河道の変遷や、舟運との関係などから町づくりの歴史的評価をおこないたい。

参考文献

- 1) 川村公一 ; 米代川 - その治水・利水の歴史 - 無明舎出版 1994 年 3 月
- 2) 鷹巣町史第 3 巻 ; 鷹巣町 PP.76 1989 年 3 月
- 3) 田口勝一郎ほか ; 図説秋田県の歴史 河出書房新社 PP.67 1987 年 7 月
- 4) 鷹巣町史年表 ; 鷹巣町 PP.2 1989 年 3 月
- 5) 前掲 4) ; PP.8
- 6) 鷹巣町史別巻資料編二 ; 鷹巣町 PP.619 ~ 626 1987 年 3 月
- 7) 大館市史第 1 巻 ; 大館市 PP.475 1979 年 3 月
- 8) 前掲 2) ; PP.431
- 9) 鷹巣町史別巻資料編一 ; 鷹巣町 PP.117 1986 年 3 月
- 10) 鷹巣町史第 1 巻 ; 鷹巣町 PP.379 1988 年 3 月
- 11) 前掲 2) ; PP.420
- 12) 秋田県土地改良史 ; 秋田県農政部 PP.40 1985 年 3 月

